音楽人間模様

中野雄■文
［第86回］

アベノミクスの震源地＝世界的経済学者・浜田宏一イェール大学名誉教授 80歳の〈作曲家〉デビュー

もしかしたら、本誌の読者にはお馴染の薄い名前かもしれないが、アメリカのイェール大学名誉教授に浜田宏一という世界的に有名な経済学者がいる。日本におけるタイトルは「内閣官房参与」――政治・経済に関心のある方なら、誰知らぬ者なき「アベノミクス」の理論的指導者である。自由民主党・安倍政権による異次元の金融緩和政策と、その結果もたらされた劇的な円安と急速な株高は、浜田宏一経済学博士など、ごく少数の経済学者の経済理論と政策提言を、安倍晋三・内閣総理大臣が勇断をもって採用し、実行に移したことによって始まった。

「失われた10年」とか「20年」とかいわれる日本経済の沈滞を、政治的決断によって転換し、成長路線に乗せようという、考えようによっては歴史的な事案である。反対論が渦を捲き、逆風が吹くのは当然であろう。少子高齢化や、先進国の景気減速といったマイナスの環境の中で、日本経済が再び陽光を浴びる日が訪れるか否か――いうなれば、一国の命運を左右しかねない経済政策の震源地であるから、浜田宏一教授は間違いなく「時の人」の一人であることに間違いはない。

その浜田教授から、私のパソコンに、突然Eメールが飛び込んできた。「来日の折、昼食をご一緒したい」とのこと。

ご面識をいただいたのは昨年の秋である。私が社会人生活の第一歩を刻んだ日本政策投資銀行である記念のパーティーがあって、席上、橋本徹社長から「この方が著名な浜田宏一先生です。大学時代、中野さんの恩師である丸山眞男先生の講義も受けられたことがあるとのことで、何よりも音楽が大好きだと承っておりますので」というのが、ご紹介の弁であった。

初対面のご挨拶を交わしたあと、名刺交換をして驚いた。字体が英文で、日本における連絡先が首相官邸になっている。「英語の名刺しか無いものですから」と、浜田教授は弁解するように仰った。

音楽がお好きとのことであったから、「届くかな」と心配しながら著書を首相官邸宛に何冊かお送りしたら、「経済の話ではない。音楽の話がしたいから」と、ランチのお誘いがかかった。場所は、教授が東京での定宿にしておられる都心・麻布の国際文化会館である。

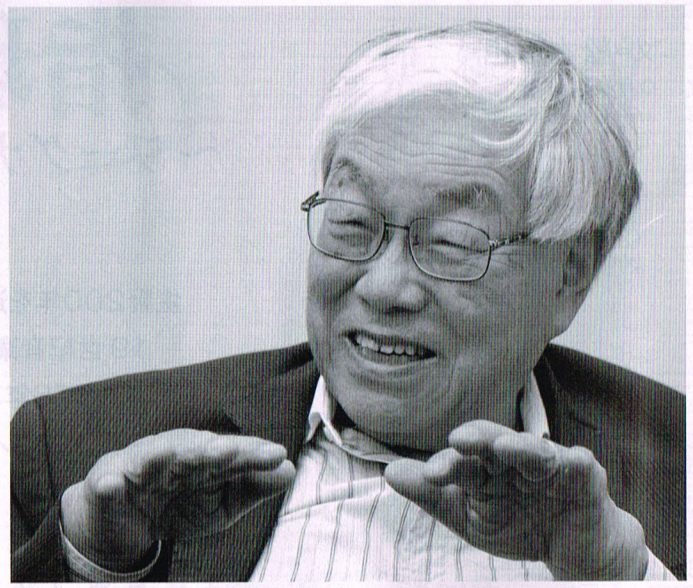
往年の富豪によって造成された美しい日本庭園を窓越しに見ながら、浜田教授が遠慮がちに切り出された。口調が穏やかな方である。

「私の子供の頃の夢は、作曲家になることでした。ですから、少年時代に書いた童謡が何曲かあります。それから歌曲などがいくつか。歌詞は、戦前の国定小学校教科書からとったもの、詩人の北原白秋や野口雨情の作品などです。東大時代にはスポーツの応援歌の公募に応募して入選、人生初の印税だったか、賞金をいただきました。1万円だったかな。60年前の話ですから、結構多額でしたね」

懐かしい青少年時代を語りながら、浜田教授は本題に入った。

「アベノミクスが順調に滑り出して、そのおかげもあってのことでしょうが、私の本も良く売れているようです。ですから、この際、作品をCDに出来ないかなと思い始めたのです。録音とか制作とか、どうやったらいいのかわからないし、費用の見当もつかない。そんなとき、中野さんとお知り合いになれましたので、今日は具体的なお話を伺おうと、ご足労をお願いしたわけです」

ご説明によると、浜田教授は大学時代、医学部に在籍しながらプロ並みの音楽活動を続けていた伊藤隆太に作曲法を師事、その後、指揮者としても有名だった山田一雄や著名な現代音楽作曲家・入野義朗にも教えを仰いだことがあったという。更に、東京大学経済学部の教授を経てイェール大学で経済学を教える立場になってからも、音楽創作への熱意は衰えることなく、音楽学部を併設している同大学では、「作曲法を学ぶために夜学に通っていました」というのだから驚く。



浜田宏一
（はまだ・こういち、1936－）
東大法学部卒、同大経済学部に入学し、大学院で修士、イェール大で博士号を取得。同大でノーベル経済学賞のジェームズ・トービン氏に師事。専門は国際金融論。2012年、内閣官房参与。東京大学名誉教授、イェール大学名誉教授。

もとより本人はそのようなことは噯気にも出さないが、このところ多数出版されている浜田教授の著書の売り文句は「ノーベル経済学賞に最も近い人物」なのである。

近代・現代の経済学、特に専門誌に掲載されるような論文は難解で、しかも英文が多い。そのような高度な分野に取り組んでいる世界的な学者が、幼き日に抱いた夢が忘れられないで、作品を五線譜に認めているだけでなく、より深く、より高度な技法修得を目指して作曲学講座の夜間講義にまで出席し、研鑽に努めている――安倍内閣の官房参与、年齢79歳の国際的経済学者の「生き方」に私は胸中、感動の思いを抑えられなかった。

やがて帰米された浜田宏一教授から、童謡、歌曲、重唱曲、讃美歌、器楽曲などの譜面が20曲余り送られてきた。発売は来年1月。80歳の誕生日をご希望。

素人が徒然なるままに書いた作品ではない。「対位法の勉強が足りないんで」などと浜田教授は謙遜しておられたが、どうして、どうして……。

直ちに、私は信頼している洗足学園音楽大学・大学院の吉武雅子教授（大学院研究科長）に協力を仰ぎ、パリ在住のヴァイオリニスト・瀬川祥子、ソプラノ歌手・工藤夏子、同じく佐藤容子、メゾ・ソプラノ歌手・佐藤寛子（佐藤容子・寛子の姉妹は「シュガーシスターズ」というデュエットを結成）など、いま売り出し中の若手・中堅音楽家を糾合して録音に望むこととした。日本作曲界の未来を担う偉材・松尾祐孝洗足学園音楽大学・大学院教授（日本現代音楽協会理事・財政戦略企画室長）にも、専門家としてサポートをお願いした。

そして世の中、全く何が起きるかわからない。自作曲のCD録音企画が進行している浜田宏一教授のもとに、「新曲」の創作依頼が舞いこんだのである。以前、本誌に紹介した「モーツァルト音楽療法」の和合治久埼玉医科大学教授を中心に催される「第1回・心と体を健やかにする音楽セラピーコンサート」（本年8月1日、松本市音楽文化ホールで開催予定）のハイライトとして、《信州シンフォニー（信州賛歌）》を是非、というのが、主催者を代表する山岸英史氏からの申し出であった。しかもこの新曲、かの有名人・新垣隆元桐朋学園大学講師との競作らしい。

「独創性は美の存在、美的感受性によって培われる」というのが、著名な数学者・藤原正彦先生の持論だと聞く。浜田宏一教授・作曲家デビューという話を知ったら、藤原先生は何と仰せられるであろうか。

Takeshi Nakano
1931年、長野県松本市生まれ。東京大学法学部卒業。日本開発銀行（現・日本政策投資銀行）を経て、ケンウッド代表取締役。レコード事業、音響機器 生産等も担当した。現在、音楽プロデューサーとして活躍するほか、映像企業「アマナ」の常任顧問などを務める。レコード・CDの制作で「ウィーン・モーツァルト協会賞」「文化庁芸術作品賞」などを多数受賞。著書に「モーツァルト 天才の秘密」「小澤征爾 覇者の法則」「ウィーン・フィル 音と響きの秘密」「丸山眞男 人生の対話」（いずれも文春新書）、「指揮者の役割」（新潮新書）などがある。